自然科学書協会会報
NSPA JAPAN
THE NATURAL SCIENCE PUBLISHERS' ASSOCIATION OF JAPAN
発行人｜金原　優
編　集｜広報委員会

■ 自然科学の時間―生き物の知識
知らないことの幸せ
横浜国立大学名誉教授　青木淳一

■ 第63期第2回定時総会・会員集会の報告

■ 自然科学書フェア2014のご案内ほか

2014.7.1　NO.3　（通算73号）

一般社団法人　自然科学書協会｜〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-101｜神保町101ビル1階｜TEL 03-5577-6301｜http://www.nspa.or.jp/

●●自然科学の時間―生き物の知識●●

知らないことの幸せ

横浜国立大学名誉教授　青木淳一

東北のある温泉宿に泊った時のことである。食堂には団体客が来ていた。窓の外に見える森の連なりを見て、「ああ、まだこんなに大自然に覆われたところがあるんだね」と感激しきり。しかし、その森はすべて一斉に造林されたスギの人工林であった。私自身はそれが残念で、少しはブナの自然林や雑木林が見えればいいのになあ、と思っていたところであったので、感動している団体客を見て、あの人たちは幸せなんだなあと思ってしまった。

●みじめな自然の姿

私の専門は土壌中に生息するササラダニ類というダニの仲間であるので、その調査のために日本全国の森を訪ね歩いてきた。大学の研究室には助手（今は助教と言う）がいて、彼の専門が植物だったことから、植物のことはほとんど知らない私は彼からずいぶんと知識を授けてもらった。日本の森林を構成する主要な樹木の名前、それが亜熱帯から亜寒帯まで気候帯が変化するにつれ、どのように変わっていくか。また、人間の干渉によってどのような姿に変化していくかを知った。水生昆虫が専門の友人で、キノコや山菜に大変詳しいのがいて、彼と一緒に山歩きをすると、シイタケ、マツタケよりももっと美味しいキノコや八百屋では売っていない香り高い山菜を収穫する楽しみを知った。動物に関しては、専門のダニ以外にも蝶や甲虫などの昆虫、蛙や蛇などの名前や習性が私には大体はわかる。こうして、私は普通の登山者よりも多くの楽しみを味わいながら山や森を歩いてきたのだろうと思う。

自然に関して、動植物に対して、それほど深い知識を持たない一般の人たちは、上記のスギの人工林を天然の自然と勘違いするようなことがしばしばおこる。神奈川県鎌倉市には鶴岡八幡宮の森があって、そこにはリスがたくさん住みついている。鎌倉を訪れた人も、鎌倉市民の多くも、「ああ、八幡様の森にはまだリスがたくさんいるのだ」と喜びながら、その姿を見つめている。しかし、このリスは日本在来のニホンリスではなく、近年になって台湾から日本に侵入してきた外来生物、タイワンリスなのである。日本のリスよりも大型で、電話線をかじり、そのせいで鎌倉市の電話が何回も不通になったことがあり、電話線を補強する作業を行っている。このような有害な侵入者であっても、知らない人たちは「可愛いね」とにこやかに眺めている。

長野県の美ヶ原はツツジの大群落で有名である。高原一面に咲くツツジの景観は見事である。しかし、このツツジはレンゲツツジといって猛毒植物である。誤って食べれば呼吸困難を引き起こすので、ここに放牧された馬はこのツツジを避けて草を食べ、そのためにレンゲツツジだけが一面に残ったのである。私もそれと知りながらこのツツジの花弁をちょっとだけ噛んでみたら、物凄い苦さが舌の上に残り、三日間消えなかった記憶がある。

神奈川県の丹沢に檜洞丸というところがある。標高一六〇〇メートルほどの円い山頂であり、笹原の中に白骨化したようなブナの枯れ木が立ち並んでいる。そこへやってきたハイカーが「なんて神秘的な光景なんでしょう」と感動していた。しかし、私たちの調査で分かったことは、自動車や工場などから排出される亜硫酸

丹沢檜洞丸のブナ枯死林

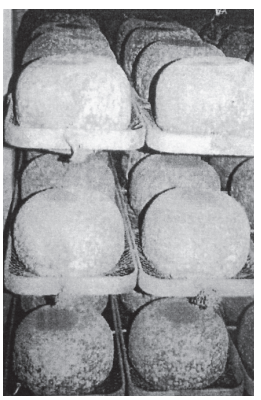
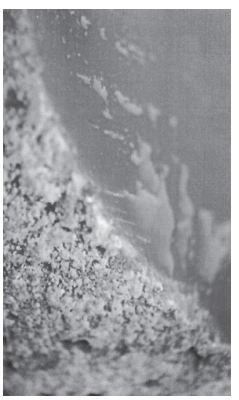
ガスを含む酸性の霧が麓から這い上がってきて、原生林のブナを死なせてしまったのである。植物学者や生態学者から見れば、見るも無残な森の姿なのであって「美しい」とか「神秘的」どころではないのである。

ここまで書いてくると、一般の人たちの無知を指摘し、あざ嗤うような調子になってきて、我ながら罪悪感にさいなまれてくる。しかし同時に、スギの人工林を見て感動し、八幡様のタイワンリスを眺めて可愛らしいと思い、丹沢のブナの白骨林をみて神秘的だと感じている人たちのほうがずっと幸せなのかもしれないと思うに至る。なまじか知識があるために、建築材料の確保のために必要であるとはいえ、スギの拡大造林による自然界の生物多様性の低下を嘆き、タイワンリス、ハクビシン、アライグマ、ブラックバスなどの外来生物の侵入を心配し、大気汚染によるブナ枯れに心を痛めている研究者は、なんと不幸なのだろうか。ひとたび野外へ出た研究者が目にするものは、いたるところみじめな自然の姿ばかりであり、本物の自然に巡り合って本当に心休まる瞬間はめったに訪れてこない。いつも心配し、嘆き、悲しんでいるのである。知らないということは、なんと幸せなことだろうか。

●ダニチーズ

話はすこし変わるが、化粧品として使われる口紅や頬紅の赤い色素はカイガラムシから採られたものである。サボテンにつくコチニールカイガラムシ（ラックカイガラムシ）のメスを乾燥させたものからアルコールまたは水で色素を抽出する。カイガラムシの汁と知りつつ、毎日それを唇や頬に塗っている女性の割合は、どのくらいいるのであろうか。知らないに越したことはない。

ブルーチーズというカビ付きのチーズは良く知られているが、ダニ付きのチーズがあることをご存知だろうか。ドイツでは昔からある種のチーズを熟成させるためにチーズコナダニという粉ダニの一種を用いており、そのチーズを Milben-Käse（ダニチーズ）と呼んで珍重している。日本でもよく見かけるミモレットという濃いオレンジ色の堅いチーズも、わざとダニをつけて熟成させる。カラスミのような味がして私の好物のチーズであるが、白い表面の皮の部分を見ると、ダニが喰った跡の穴がたくさんあいているのがわかる。チーズの工場に尋ねてみると、ダニをつけないとうまく熟成しないそうである。これも知らないほうが、いいかなあ。

ミモレットの熟成中と熟成後、コナダニの一種

●誤表記ではなく偽装

話が食べ物のほうに向いてきたが、最近騒がれている食品の偽装や誤表記問題も、知るか知らないかの問題になってくる。今から十年も前のことだが、魚屋の店先にムツと表示した切り身が置いてあった。切り身といえども皮がついているので、これはムツではなく、ギンダラであることを私は見抜いた。そこで、私は「このギンダラを一切れくれよ」と指さして言った。そのときの魚屋の主人のポカンと口をあけた顔を今でも覚えている。「だんな、水産学部の先生ですか?」ときた。これは明らかに誤表記（うっかりまたは知識不足）ではなく、偽装（知りながらわざと）である。多くの主婦たちは高級魚ムツだと騙されてギンダラを買っていったことだろう。よく知られているアマダイも、実はシロアマダイ、アカアマダイ、キアマダイの三種あって、シロアマダイが一番うまく、キアマダイが最も味が落ちる。これをすべて単にアマダイと表示するのは間違いではない。しかし、専門家が鰭の色を見れば、この三種の区別はつく。上記の「ムツ」の場合は許されることではないが、「アマダイ」の場合は許されていい。ホテルのレストランで出されたエビについては、なかなか難しい。イセエビ科にはイセエビ、シマイセエビ、カノコイセエビ、ゴシキエビ、ニシキエビなどが含まれていて、これらを総称してイセエビと言うこともある。もし、ゴシキエビを材料にして料理したものをイセエビと表示した場合、イセエビを総称と考えれば問題ないが、種名と考えれば偽装になる。なぜなら、ゴシキエビのほうが味が劣るからである。さらに、これをロブスターと表示した場合も、ロブスターを大型歩行性のエビの総称と考えれば問題ないが、ロブスター（アカザエビ科）とイセエビ（イセエビ科）は違うものだと主張するならば、偽装になるだろう。何も知らないで、美味しい、美味しいと言って食べれば、幸せなのかもしれない。

かつて少年の頃、山道を歩いていて名も知らぬ蝶が目の前の花に止ったのをうっとりと感動して眺めたことがあったが、今だったら「ウラギンスジヒョウモンかな、いや、オオウラギンスジヒョウモンだ」などと見極めてしまう。「名も知らぬ」ところがいいのであって、正式な和名や学名までわかってしまったら、

もう幻滅で、詩情も幸せ感も吹っ飛んでしまうのである。

青木　淳一（あおき　じゅんいち）
一九六三年、東京大学大学院生物系研究科修了。農学博士。一九六四年、ハワイ・ビショップ博物館上席研究員。一九六五年、国立科学博物館動物研究部研究官。一九七七年、横浜国立大学環境科学研究センター教授、続いて同センター長。二〇〇〇年、神奈川県立生命の星・地球博物館館長。現在、横浜国立大学名誉教授。専門はダニ学、土壌動物学、甲虫分類学。日本動物学会賞、南方熊楠賞など六賞を受賞。

■第六三・六四期委員会開催一覧■
（二〇一四年四月～六月）

●理事会
・四月一七日（木）／一五時～一六時三〇分　日本出版クラブ会館
・五月一五日（木）／一四時三〇分～一六時　日本出版クラブ会館
・六月一九日（木）／一五時～一七時　日本出版クラブ会館

●常務理事会
・四月一一日（金）／一二時～一三時三〇分　文化産業信用組合

●専門委員会
・四月八日（火）総務委員会／一三時～一四時三〇分　協会事務所
・四月一五日（火）広報委員会／一八時～一九時　コロナ社
・五月八日（木）販売・出展委員会国際小委員会／一七時～一八時三〇分　學士會館
・五月一二日（月）販売・出展委員会自然科学書フェア小委員会／一六時～一七時　日本出版クラブ会館
・六月三日（火）販売・出展委員会東京国際ブックフェア幹事会／一六時～一七時　文化産業信用組合
・六月一八日（水）販売・出展委員会／一六時～一七時　文化産業信用組合

■その他
◆五月一四日（水）全出版人大会がホテルニューオータニで開催された。

■事務局だより
〈代表者の変更〉
●株式会社　杏林書院
旧代表者：太田　博
新代表者：太田康平

●東海大学出版部
旧代表者：松前達郎
新代表者：髙野二郎

〈商号の変更〉
●旧　東海大学出版会
新　東海大学出版部

〈専門委員会委員の変更〉
●広報委員会
・一般社団法人　家の光協会
旧委員：吉原　隆
新委員：柴野　豊

〈住所の変更〉
●株式会社　シーエムシー出版
旧住所　東京都千代田区内神田一―一三―一豊島屋ビル４Ｆ
新住所　東京都千代田区神田錦町一―一七―一ＮＫ第一ビル２Ｆ
電話・ファクス　変更なし

第六三期第二回定時総会・会員集会

五月一五日（木）一六時より日本出版クラブ会館において、一般社団法人自然科学書協会第六三期第二回定時総会が開催されました。総会に先立ち金原理事長は、出版権に関わる一連の案件はもとより、来年にも予想される消費税増税時の対処など、山積する諸問題に理事長として引き続き注力していくので、会員各社には力添えをいただきたいと挨拶されました。

定款二八条により金原理事長が議長に就任し、議長は出席会員社三四社、委任状出席二九社、合計六三社の出席により総会開催に必要な定足数が確保された旨を会場に報告したうえで、議事録署名人を選出し、議案の審議が行われました。

第一号議案「第六四期事業計画書承認の件」は吉野総務副委員長より、第二号議案「第六四期収支予算書承認の件」は飯塚総務担当常務理事より報告・説明が行われ、いずれも賛成多数により承認されました。これを受け議長は閉会を宣言し、南條専務理事による閉会の挨拶で総会は終了となりました。

引き続き同所にて行われました会員集会には、会員各社より三四名が参加しました。

販売・出展委員会（筑紫委員長）、広報委員会（牛来委員長）、著作・出版権委員会（及川委員長）、研修委員会（曽根委員長）、総務委員会（長委員長）、税

■第六三期／第六四期広報委員
〈担当常務理事〉
宮部信明（岩波書店）
〈委員長〉
牛来真也（コロナ社）
〈委　員〉
柴野　豊（家の光協会）
桑原正雄（岩波書店）
竹西素子（オーム社）
稲沢　会（共立出版）
矢吹俊吉（講談社サイエンティフィク）
大井隆之（コロナ社）
松田和貴（電気書院）
遠矢良太郎（南江堂）
増田素美（丸善出版）

編集後記

先日、曽祖父の「西南戦争従軍日誌」が出てきた。日誌は一八七七年二月から綴られていた。和紙でぼろぼろになっており、しかも毛筆、行書体で綴られており、皆目わからなかったので、地元の歴史編纂室の力を借りて、活字に清書していただいた。

安政二（一八五五）年生まれ、当時二二歳の彼が何を言わんとしたか、漢字ばかりで難解であったが、少しずつ読めるようになると俄然面白くなり、一二七年前に一気に引き込まれていき、仏壇からにらむ曽祖父と一本の糸で結ばれたような気がした。ぼろぼろの和紙に書かれた日誌を手にして、今という時間の大切さと、あらためて次世代に引き継いで行く責任が課されていることを強く感じた。

この内戦で五男であった曽祖父は官軍に従い生還したが、長男は薩軍で熊本城下にて戦死している。（Ｒ・Ｔ）

制・再販流通特別委員会（金原委員長）の順で活動報告が行われ、出席者は活動内容に興味深く耳を傾けていました。各委員長の熱意あふれる報告により、終了予定時刻を三〇分ほど超過し会員集会はお開きとなりました。

全体風景

南條光章 専務理事

金原　優 理事長

（総務委員長　長　滋彦）

国立国会図書館見学会報告

五月二八日（水）に研修委員会による「国立国会図書館東京本館参観」が開催され、二四名が参加しました。昨年一一月に開催し好評を博した参観の二回目となります。

まず始めに国立国会図書館電子情報部の樋口早苗氏より「資料デジタル化に係る業務説明」と題して、資料デジタル化の目的と背景から予算の推移、大規模デジタル化事業として原資料の保存を目的とした「電子図書館サービス」と、昨年来各出版社にも問合せのあった絶版等入手困難な資料を公共図書館でも端末で閲覧可能とする「図書館送信サービス」について、スライドを交えながら約四〇分の説明を受けました。

その後、係員の案内・説明の下、利用提供スペースと地下八階にも及ぶ書庫を約一時間かけて見学し、最後に質疑応答の時間を経て研修会を終了しました。

会場風景

（研修委員会　筑紫　和男）

自然科学書フェア二〇一四

当協会が書店の協力を得て開催する「自然科学書フェア」は、本年は北九州市の喜久屋書店小倉店で一〇月一日（水）～一〇月三一日（金）の期間に行うことで決定し、販売・出展委員会の自然科学書フェア小委員会で準備が進められています。

喜久屋書店小倉店開店一〇周年を記念するフェアとして、「科学立国日本を支える自然科学書の力」をテーマに、身近な科学から最先端の科学に至るまでわが国の理学・工学・医学・農学・家政学の分野を担う協会加盟各社から自信の書籍が出品されます。

普段から専門書に親しんでいる方々はもちろん、あまり専門書に馴染みのない方々にも新たな本との出会いの場になるフェアを目指しています。目下、展示の方法や広報活動などについて詰めの相談を行っています。会員各社の皆様には、多くの図書を出品下さいますようお願いいたしますとともに、宣伝のご協力をよろしくお願いいたします。

（販売・出展委員会副委員長　池田和博）

自然科学書協会講演会二〇一四

今年も自然科学書協会講演会を七月二七日（日）に開催いたします。時間は一四時三〇分から一六時一〇分まで、場所はアルカディア市ヶ谷（私学会館）（東京都千代田区九段北四―二―二五）となっており、聴講は無料です。なお、昨年と場所と時間が変わっておりますのでご注意ください。

講師は発酵学の第一人者である東京農業大学名誉教授の小泉武夫先生にお願いいたしました。講演のテーマは「わが心に残る発酵食品」となっています。「食の冒険家」を自認し、テレビでも活躍する小泉先生が、世界中をまわり食してきた発酵食品を紹介するとともに発酵の魅力についても講演される予定です。会員社の皆さまのお越しをお待ちしております。また、友人、知人、関係者の方など多くの方に告知いただけますようお願いいたします。

講師を務める小泉武夫先生

お申込方法は、自然科学書協会のホームページ（「自然科学書協会」を検索してください）のトップページにあるバナーをクリックして申込ページへ移動し、必要事項をご記入ください。席に限りがありますので、お早めにお申し込みください。多くの方のご来場お待ちしております。

（広報委員会）